



## 札幌名医物語

**腰痛・しびれの原因**  
「腰部脊柱管狭窄症(よ  
うぶせきぢゅうかんき  
ょうきくしよ)」  
・年だから仕方ない  
・あきらめる必要はない



腰痛の原因は、腰部脊柱管狭窄症(よ  
うぶせきぢゅうかんきょうきくしよ)で、その典型的な症  
状が下肢のしびれ・痛みである。  
それが原因で歩みづらく、やが  
て歩けられなくなるなど、大変な状  
況に陥ってしまうことという状況  
がある。これは治療によって変

化していくことができる。ただ、な  
らざるを得ない、年だから仕方ない、  
とあきらめる必要はない。治療法  
として「小断医師は、腰部脊柱  
管狭窄症は内視鏡などの保  
存的治療で症状が緩和される  
ものが多い。手術による、きつめの  
治療もできるが、腰部手術  
が必要なものも少なくない。臨  
床は内視鏡を中心とした治療  
治療やリハビリテーションなど  
による治療。症状が軽い場合には  
リハビリテーションを行う場合も  
あります。これが、保存的治療  
と評される治療法なのです。及  
び、それでも、神経のいく改善が得  
られない、あるいは、改善が得  
がしたくないなどの強い希望がある  
ときに手術の可能性をもち、  
医師に相談していただくのが、

治療法として、腰部手術は、な  
らざるを得ない、年だから仕方ない、  
とあきらめる必要はない。治療法  
として「小断医師は、腰部脊柱  
管狭窄症は内視鏡などの保  
存的治療で症状が緩和される  
ものが多い。手術による、きつめの  
治療もできるが、腰部手術  
が必要なものも少なくない。臨  
床は内視鏡を中心とした治療  
治療やリハビリテーションなど  
による治療。症状が軽い場合には  
リハビリテーションを行う場合も  
あります。これが、保存的治療  
と評される治療法なのです。及  
び、それでも、神経のいく改善が得  
られない、あるいは、改善が得  
がしたくないなどの強い希望がある  
ときに手術の可能性をもち、  
医師に相談していただくのが、

HIROSHI OGUMA

医療法人 札幌円山整形外科病院

## 医長 小熊 大士

1970(昭和45)年1月生まれ、1995(平成7)年札幌医科大学医学部卒業、同整形外科入局、2001(平成13)年医学博士号、2002(平成14)年日本整形外科学会認定専門医、日本関節学会「高度賞」、2004(平成16)年日本整形外科学会留置留置術専門医、2006(平成18)年札幌円山整形外科病院勤務。

### 真剣に向き合い 理解することから始まる 腰痛治療の名医

**苦しみを  
取り除いてあげる事が  
私の使命**  
「命は、誰かから奪われていく  
のは、医療者としてのプライオ  
リティとして、大抵の事は治せる  
札幌円山整形外科病院の  
大断医師、その治療信念は  
患者さんへの、日々、誠実に  
患者さんへの、日々、誠実に  
患者さんへの、日々、誠実に  
患者さんへの、日々、誠実に

**自分の  
体質と神経から  
誕生した  
腰痛治療最先端手術の  
スペシャリスト**  
医療の進歩は目覚しく、近  
年、この分野においても治療  
手術(Minimally Invasive Surgery)の  
医師が揃っている。この最先端  
治療は、患者さんへの痛みを  
軽減し、早期に歩行を再開する  
事ができる。小断医師は、腰  
部(腰部)の手術を専門とする  
スペシャリストとして、患者さん  
への、日々、誠実に



手術を受け、術後の経過が痛み  
を体験しています。約1ヶ月の  
入院期間は全く仕事もでき  
ず、家族に心配をかけたこと  
のような体験から、自分でも  
し、もう一度の手術を受けるの  
だとしたら、やはり可能な限り  
必要最小限の切り口で身体に  
負担をかけない手術を選択した  
ことを覚えています。以来、この最先端  
治療に切り込み始めました。  
また、私自身、性格的に立ち回  
りや、人付き合いに苦しみ、  
また、自分自身、性格的に立ち回  
りや、人付き合いに苦しみ、  
また、自分自身、性格的に立ち回  
りや、人付き合いに苦しみ、



Many noted doctors exist in this Sapporo as well.



さんの強い意思が必要と、小児  
医療は言う。外来患者さんの  
内、手術を必要とするのは1割  
程度です。残りの9割は様々な  
治療法で腫瘍を打倒できます  
ので、特に患者さんたちとよく

話し合い、適切な治療法を提供  
してあげたいです。あくまで腫  
瘍イコール手術ではないという  
ことを強く申し上げておきま  
す。腫瘍は病気でありません  
から、最終的に手術をするかど  
うかは患者さん自身の選択で  
す。もちろん手術を行わないこ  
打倒できないケースもあります  
が、腫瘍の痛みは辛いけれど、命のま  
までいい、という患者さんもい  
ますので、そのような方にはそ  
れぞれ合った長期的な保存療  
法のプランを一緒に考えたいま  
す。患者さんが手術を選択され  
た場合には、それ以外のほかのツ

ラウド（生活習慣）を理解しなが  
ら、信頼関係（絆）を築くことを  
何より大切にしています。患者  
さん自身も一緒に手術に参加す  
る人、という気持ちも合わせて  
持っていたらいいようにお話を  
してまいります。また、腫瘍科は腎  
臓や骨や多発腫瘍に悩まされ、  
満足いく日常生活が送れない  
ないケースもあって、統計的にみ  
ても精神的に落ち込みやすい場  
合が多いですから、私は精神力  
のサポートも重要なこと考えてい  
ます。ですから、私はおひとりの  
ひとりと多くの話し合いをもも

ていただきます。患者さんとは常  
にスクラムを組んで考えていき  
たいと思っていますので、どこか  
話し合うことなら私のスタイル  
になってもいいです。患者さん  
と最終に同意合致で選択の手術  
を決めし、お心や心配、そして不  
安を少しでも和らげてあげられ  
たらと考えております。一基にな  
って取り組んでいきます。腫  
瘍でお悩みの方は、まずは乳癌  
に相談してみてください。』

